

< 1年間の取組 >

< 第3学年 >

1 学習のテーマ

3年間のテーマ

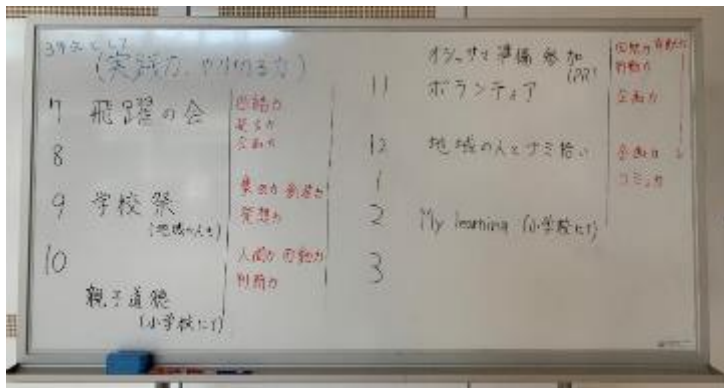
『地域に生きる人材になるための力を養おう』

今年度のテーマ

「社会に関わる」「活動を企画する」

2 1年間の取組の概要（右図参照）

今年度、第3学年では、まず1年間の見通しを立てることから始めた。総合的な学習の時間においてどのような活動をしていくか。そしてその活動を通して身につける力が何であるかを学年で話し合った。



学年で考えた年間計画

実行委員長の強い思いもあってまずは3月にできなかった「立志式」を行うことになった。しかし実行委員から「もう3年生になっているから立志式という名前はおかしい。」という話になり名称を変更し、「飛躍の会」となった。右の表と見比べるとよく分かるが、実際の取組はこの計画とは大きく違うものになった。

今年度、「飛躍の会」「学校祭」「修学旅行」「Bridge～おかえりなさい安居～プロジェクト」という取組をおこなったが、どの取組においても、『〇〇に向けて』『実際の活動』『振り返り』という活動を行った。

最後に、3部構成（「これまで」「安居中学校の3年間」「さいごに」）でこれまでの自分の振り返りを作成し、クラスで自分の学びなどを共有した。

3 Bridge～おかえりなさい安居！プロジェクト

① このプロジェクト学習に至る経緯

コロナの影響で、修学旅行が福井県内、小浜市となった。これまでの学習のまとめとして「地域に恩返しをする」という大きな目的に、修学旅行を通して「家族のような温かさ」を大事にしていくということ。さらに

中学生がそれにどのようにつながっていくかという話し合いを経て「Bridge」というキーワードができた。

月／学年	3年
4月	臨時休業
5月	
6月	ACS (Ago Community Session) の実施 飛躍の会に向けて
7月	「飛躍の会」実施 飛躍の会の振り返り
8月	学校祭に向けて
9月	学年打ち合わせを実施 「学校祭」実施 学校祭振り返り
My Learning	
10月	修学旅行に向けて 「修学旅行」実施 修学旅行振り返り 「地域に貢献する」に向けて
11月	「Bridge～おかえりなさい安居！プロジェクト～」実施
公開研究会でのMy Learning	
12月	Bridge～おかえりなさい安居！プロジェクト～振り返り
1月	
2月	「安居中学校での学び」作成
My Learning	
3月	「安居中学校での学び・これからの自分」製本・クラスでの共有

私たちは、修学旅行で「人の温かさ」を肌で感じることができました。それは、お客さんでありながら、阿納の人たちと『家族』のようでした。
私たちは、その『家族のような温かさ』をこの安居地区に還元できたらと考え、自分たちがその架け橋になりたいと思っています。

このプロジェクト学習の目的

生徒との話し合いの中で出てきたいろいろな『つながり』ごとにグループを編成し、活動に取り組んだ。グループごとの活動ではあるが、クラスとしての横の『つながり』も意識してほしかったので、右のキーワードを提示し、それぞれのグループでの活動が始まったのである。また、3学年担当教員は4人いるが、教員をそれぞれのグループ担当を決めた。

◎身につける力

企画力、交渉力

◎大事にして欲しいこと

- ・学年での責任
- ・グループでの責任 責任の偏りが無いこと
- ・個人での責任

◎取り入れたい内容

- ・3年生全員が関わることができる。

② 活動の実際

つながり	地域のひとと私たち（高松 T）		
目的	・地域のために働いている人のことを知り、感謝の気持ちを広める	・お世話になった保育園に恩返しをする ・人手不足を補う	・地域のお年寄りと一緒にふれあうことで温かさを感じる
つながる団体等	交通安全協会	西安居保育園	安居公民館
主な取組	交通安全運動に参加	掃除、球根植え	公民館の大掃除+おもちつき
活動の流れ	11月13日（金） 駐在所（辻内さん）を訪問 11月27日 校長ヒアリング 11月30日（月） 辻内さん来校 12月2日（水） 学年全体で協議・準備 12月11日（金） 交通安全運動を実施（要項参照）	10月27日（火） 土耕し（5人） 11月13日（金） ・名前プレートの試作品作成 ・保育園へ企画書を提出 11月20日（金） ②球根植え（7人） 小物作り	11月13日（金） ・掃除用具の確認 ・掃除中のお年寄りとの関わり 11月27日 校長ヒアリング 12月9日 公民館との打ち合わせ 12月11日（金） ⑤大掃除 お年寄り+3年 ⑥もちつき（要項参照）
11月13日 14:50～ 学年全体での意見交換会			
つながり	安居地区と私たち（川崎 T）	小学校と私たち（赤澤 T）	他地域と私たち（伊部 T）
目的	・安居地区の方々に恩返しを届ける	・6年間学んだ校舎への感謝を行動にする。 ・次世代へ学んだことを伝え、小学生にとって将来プラスにする。	・安居と越廼のことを他の地域の人に広め、両方の地域にとってプラスになるようにする ・地域へのいろいろな関わり方を考え、その可能性を広げる
つながる団体等	公民館+育成会（内田さん）、PTA（東さん）、科学技術高校、小澤工務店	小学校	越廼中、池田さん
主な取組	看板 イルミネーション	清掃を通しての愛校心を醸成する	越廼中と交流して新しいモノ・価値を創造
活動の流れ	～11/上旬 看板・イルミネーションのデザインを考える 5日 デザインを公民館へ 6日 高校の先生と情報交換 ・デザインを再度考える ・育成会のイルミ搬入（済） 27日 内田さん、東さん来校して打ち合わせを実施 12月4日 校長ヒアリング（要項参照） 12月11日 校長ヒアリング 12月25日 看板お披露目・点灯式実施	11月5日 6限目 道徳「清掃」クラス内意見交換会 11月6日（金）16:00 5・6年担任に趣旨説明 11月12日（木）5・6限目 5・6年+中3が参加 話し合い・清掃・振り返り	『越廼の「塩」と安居の「生姜」から入浴剤を作れないか』の企画書を作成 11月8日 池田さんを訪問し、生姜栽培の半紙を聞く 11月6日 1年生より安居の「食」に関する話を聞く 11月27日 越廼中との意見交換会を実施 入浴剤の情報収集、塩と生姜の配合比率をかえて試作品を製造
11月13日 14:50～ 学年全体での意見交換会			

③成果と課題

*高松由紀子

「地域のひとと私たち」のチームは、まずどういうねらいで活動したいかを考えることから出発した。地域のひとと一緒に活動することそのものが目的にならないように考えたところ、「地域のひとに温かい気持ちになってほしい」、「お世話になった場所やひとに感謝の気持ちを伝えるための活動をしたい」、「地域のために活動してくれているひとや支えになっているひとを知り、他のひとにも伝えたい」という意見が出てきた。そこで、さらに3つのチームに分かれ、企画を進めることになった。

その中の一つのチームが、地域のために取り組んでくれている活動として、毎月学校前の道路で行っている交通安全運動に目を付けた。担当の生徒2人は、活動を知ることから始めたいという軽い気持ちで西安居駐在所の辻内さんとアポを取り、活動の目的や内容等を聞きにいった。具体的な目的等はぼんやりしたまま話を聞きにいったが、辻内さんは2人の思いをくみ取り、また思いを引き出しながら、大変丁寧にお話をしてくださった。そのやりとりの中で、何のためにどんな活動がしたいのかという方向性を固めていくことができたのではないと思う。

その後、企画書を書き直す度に何度も辻内さんに相談に乗っていただいた。辻内さんも生徒の思いを熱く受け止め、福井南警察署との連携もとってくださった。辻内さん自身もせっかく取り組むならと新たな提案も考えていたようである。しかし、辻内さんは自分の考えを押しつけることなく、生徒の主体性を大切にしてくれた。アドバイスも生徒が自ら考えるように促しながら、こうしたらどうかなと投げかけていた。そのおかげで、少しずつ計画が具体的になり、交通安全協会の方とも繋がり、企画を実現できるようになったのである。活動当日は、冬の交通安全県民運動の初日と重なったため、大勢の交通安全協会の方が参加してくださった。あいにくの雨の中であったが、共に活動することで、協会の方の責任感や大変さ、さらには活動のありがたさを身をもって感じることもできた。

今回は、担当生徒が辻内さんと繋がる以上に、私も辻内さんと何度も打合せや連絡を取り合ってきた。事前に、生徒主体で企画から運営までをさせてほしいという旨を伝えてあったので、辻内さんもその心づもりで生徒と接してくれた。どうやったら生徒の思いに沿った取組ができるかを考え、一歩引いたスタンスで見守ってくださった。それが生徒にとって自分達の手でやりたいと思う原動力になったのではないかと感じている。地域の方にプロジェクト学習の意義を理解してもらった上で取り組むことの重要性をより強く感じる活動になった。

*伊部雅之

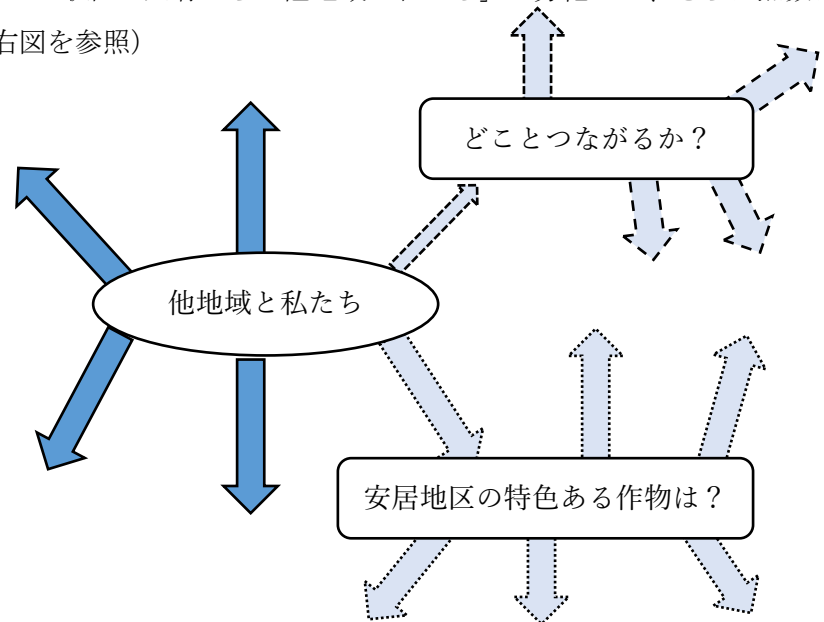
「他地域と私たち」というつながりであったが、まずどこにつながるかでとても苦労をした。中学校同士もあれば、自分たちと同じようなテーマで活動をしている団体等選択肢は数え切れないほど存在する。その無数の選択肢から絞っていくことにとっても時間を割いた。しかし時間はかけてもなかなか前に進むことができない。その中で「どこかの中学校」という方向性になり、各中学校の学級数、生徒数などが掲載されているものを参考にすることにした。その中から越廼中学校にもちかけてみようということになり、活動がスタートした。活動はスタートしたものの、どのような関わりができるのかが分からない。とりあえず私が越廼中に電話をして、越廼中の現状を確認した。すると越廼中の生徒会が作成した「越廼新聞」を手に入れることができた。その新聞をもとにいろいろと質問を考え、ZOOMによる意見交換会に臨んだ。越廼中の3年生は、もうすでに総合的な学習のまとめを終えている状態であった。さらに越廼中から塩をいただいたが、「それを食用には使えな

い」とも言われた。それでもなんとか活用できないかと知恵を出し合った結果、「入浴剤を作ることができないか」ということになった。試作品を作り、形にできないかを模索したが、形になるところまではいかなかった。

このプロジェクト学習を通しての学びを生徒と話し合った。生徒から「うまくいかないこともある」とのことであった。ではこの失敗（何ならの形にできなかったことを失敗とするならば）からの学びは何であったのか。

このプロジェクトは、クラス全体でのこの取組の共有から「他地域と私たち」へ分化して、さらに無数にある選択しから方向性を決めていった。（右図を参照）

その際に、時間をかけての絞り込みが甘かったので、もっと時間をかける必要があったと考える。また、方向性を決めていくことができる情報が収集できるかも活動を進めていくうえで重要であることに気づかされた。



* 赤澤聡美

「小学校と私たち」グループは、「6年間学んだ校舎への感謝を行動にすること」と「次世代へ学んだことを伝え、小学生にとって将来プラスにする」ことを目的として、中学3年生と小学生で小学校の清掃活動を行い、中学校3年間で学んだ清掃に対する姿勢を伝えるという活動を行うことになった。

この活動を考えるにあたり、「小学校の清掃の様子を見たい」という意見が出て、小学校に依頼し、清掃の様子を見学させてもらった。その後、この活動について具体的に決めていく中で、生徒は「どこを掃除したいか」や「どうやって掃除をするか」などの「掃除の方法」についての話し合いに留まり、この活動を通して、小学生に伝えたいことが何かという話に至らない。そこで、改めてこの活動を通して小学生に何を伝えたいのかを確認した。グループで話し合いをしていく中で、「自分たちだけでなく学年全体でも考えたい」という意見が出た。そこで、学年全体に「なぜ掃除が大事だと思うか」「小学生に何を伝えたいか」を一緒に考えた。その中で「学校への感謝」というキーワードが挙がり、掃除を通して学校への感謝を考えていきたいと思うようになった。その後、掃除前のグループワークで、どのような発問をしたら、学校への感謝に気付き、その思いを持って掃除をすることができるかを考えたが、なかなかよりよい発問が浮かばず、悩んでいた。そこで再度、学年全体で「どのような発問にしたら、学校への感謝に気付くことができるか」を考えた。そこで出た意見をもとに、グループで練り直し、本番を迎えた。

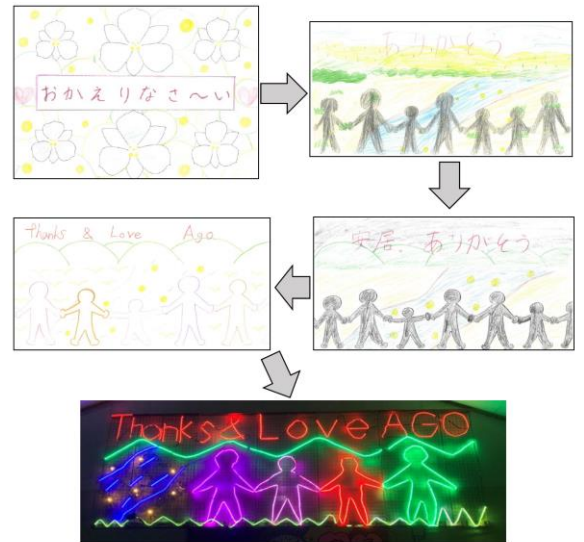
活動後、このプロジェクト学習を通しての学びについて振り返った。生徒からは「学年のみんなに意見をもらったことで新たな考えが得られた」という感想があった。グループで話し合いを進めていると、行き詰まってしまうことがあり、新しい発想が生まれにくい。そんなときに学年全体で話し合ったことで、違う視点からの意見をもらい方向性が定まったことも多かった。その都度、全体で共有する場面を意図的に設けることも考えを深める上で重要であると考えた。

また、「計画し考える時間が短かった」ことも反省としてあがった。修学旅行終了後からの企画となり、実際に小学校で清掃活動を実施したのは、修学旅行からちょうど1ヶ月後であった。目的を考え、企画を練るには

時間が短かった。今後はプロジェクト学習を生徒主体で計画・実施していくためにはどの程度時間がかかるかを考えながら日程を設定したり、いつまでに何をすべきかなど綿密な計画を立てて進めたりする必要があると考える。

*川崎太地

私が担当として「安居地区と私たち」のグループに入った時には生徒の中で「看板とイルミネーションを通して安居地区の方々に恩返しをする」という大体の方向性が定まっていた。ただ、その土台となるデザインで両チームとも、特にイルミネーションチームはととても苦労した。イルミネーションチームの初期デザインからの変遷が右の写真なのだが、彼らは最初、看板チームと同様に色鮮やかなデザインを考えていたのである。だが、実際には全てをイルミネーションで表現することは時間的にも金銭的にも不可能だった。さらに、彼らはそのデザインを自分たちの主観のみで考えていた。「そのデザインを通して、安居地区の方々にこう感じてほしい」という思いは持っていたものの、自分たちの込めた思いは全員に伝わっているという思いから抜け出せずいた。そこで一度、第三者の目線になってデザインを見ることを促すと、自分たちの伝えたい思いと実際に感じるものに差があることに気づいた。ここからは、デザインを考えるたびに第三者の立場に立ってそのデザインを捉え直すことを繰り返しつつ、実際にイルミネーションを作ることを意識しながらデザインを改善していった。



このプロジェクト学習の学びを話し合った際に、両チームとも学びの土台に校長先生や公民館の方々をはじめとする様々な人とのつながりがあったようである。そのどれもが彼ら自身の声からつながっていったものであったが、私が切ってしまったつながりもあった。科学技術高校とのつながりである。イルミネーションを作る際の具体的なやり方などを生徒以上に私が知っておかねばという思いから高校の先生に伺ったのだが、実際に生徒自身が高校の先生とつながることがないまま終わってしまった。製作方法を私が先導してしまったのである。だが、科学技術高校と生徒がつながるやり方もあったのではないかと考える。全体の見通しを持ち、全員と共有できれば、そういった時間の余裕を生み出すこともできただろう。そのためには、グループの方向性が固まった時点で私自身が誰よりも入念に準備しておかなければならなかった。

4 1年を通して

①「共に創る（生徒と教職員、教師と教職員、生徒と地域など、教師と地域など）うで目的を共有する

今年度3学年部会は、学年主任、自分、養護教諭（20代）、インターンの4名で構成している。このプロジェクトにおいて、4人がそれぞれのグループを担当することにした。3学年として「教師と教師」が共に創ることができるために、次のことに重点を置いて活動を進めた。

- ・学年会を通して、4人で活動の目的を常に共有する。
- ・若手2人に筋の通し方などいろいろな選択肢をアドバイスはするが、正解は言わない。

若い2人については、変容が見られるようになった。養護教諭は、本校の研究会の際に行われた「教師のMy Learning」で、自分の関わりを発表した。（本校では、学校での学びを語る「My Learning」という活動が行われている。今年度はその「My Learning」に生徒だけでなく教師も加わるようになった。）

私は教職大学院に通っているのだが、他の学校のインターンと12月の冬期集中講義で同じグループなっ

た時の話である。「彼が金曜日のカンファレンスで、イルミネーションのことを言っていましたよ。『ぜひ見に来てほしい』と。」とのことであった。彼が生徒との関わりを経て、自分にも少しずつ自信を持つことができるようになり、他の人に語るができていると考える。

私は「教師のMy Learning」では『伴走者としての教師』というタイトルであった。教師と生徒の関係だけでなく、教師と教師の関係においても『伴走者』という関係は重要であると考え。さらにそのような意識が世代を超えたコミュニティの形成にも必要なことではないかと考える。

②『〇〇に向けて』『実際の活動』『振り返り』のサイクルの定着

今年度はどの活動でも、右のようなサイクルを進めていった。中でも①④に多くの時間を割いてきた。サイクルを重ねていくうちに、目標の内容にも変化が見られるようになった。特に振り返りでは、「どのような学びがあったか」「なぜその学びが生まれたのか？」を自分たちの手元にあるレジュメやデザインなどを見返していった。そうすると改めて自分たちの活動を客観的に見つめ直すことができたようであった。そしてそれらの学びを、クラスで共有して、「改めて感じたつながり」をどのように表現するかについても知恵を出し合った。そのような過程を経てようやく完成したのが右の掲示物である。どのグループもつながりを体感した「輪」そして、活動の過程で行き詰まって「立ち返った輪」が描かれている。そして最終的に「地域に温かさを還元する予定が、気づくと周りの人たちの温かさを再確認して戻ってきた」ことも全体として表している。

◎活動の基本的なサイクル

① 自分たちが何をを目指すのか？（目標設定）



② 目標を達成するために計画



③ 行動



④ 振り返り、次のステップへ

行き詰ったら、目標に戻る。
計画を見直す



ただ、このような取組を行っていくためには、時間をとる必要とする。だからこそ余裕をもって計画を立てることが重要となる。来年度のカリキュラム・マネジメントにおいても留意していかなければならない。

このような取組を生徒はもちろん、教師も一緒になって重ねていくことが、重要であると考え。一緒に悩み、知恵を出し合うことで、生徒の学びにつながり、そこに関わった教師の学びにつながるのではないかと確信している。

(文責 伊部 雅之)